



国境を超えるドイツ その過去・現在・未来

160781173 武藤 嵩明

1)第 1 章ポーランド

a)ポーランドの中のドイツ人

ア)シレジアの隠れドイツ人

i)戦前ポーランド

→ウクライナ、ロシア、ユダヤ、ドイツ
人の多民族国家

ii)1985年の国内統計でドイツ人2500人程度

→1989年、東欧革命後、35万人の隠れ
ドイツ人の存在が判明



大部分はポーランド西側シレジア地方に集中
イ)追放されたドイツ人

- i)WWⅡ末期後、大半のドイツ人追放
→約800万人のドイツ人西へ離脱
- ii)被追放者、それぞれの地域ごとに組織



シュレージエンもその一つ

ウ)シレジアのポーランド化

- i)ポーランド政府:戦後、オーデル・ナイセ川の境を国境とは否容認



単独ではドイツに対抗不可、ソ連と同盟と考案

ii) 各地のドイツ人のうち、北シレジアの人には文化生活認可

→これらの人々は貴重な労働力のため



1958年に約250万人出国許可、ドイツ人皆無

エ) ドイツ人とは

i) ドイツ国籍で、公用語がドイツ語の人

ii) 東プロイセン、ダンツィヒなどのドイツ人もドイツ系住民の多数

→バルト・ドイツ人と呼称

b)原住民「シレジア族」の誕生

ア)ドイツによる開拓

i)シレジア：10世紀から

ポーランド王家に支配

→南：ボヘミア王国

西：ドイツ→ポーランドの諸侯が誘致



シュレージエンに進出

イ)ドイツとの関係性



i) 14世紀初期：シュレージエン、ボヘミア
に統合、王室の領地に

→神聖ローマ帝国の一部と同様

ii) シレジアの人口、約50万人

→そのうち半分以上がドイツ人

iii) 1526年、ボヘミア会議

→オーストリアのフェルディナントを
ボヘミア王に選任

→シレジアもオーストリア領に

ウ) プロイセンの台頭

i) オーストリア帝国の中でも豊か地域
→プロイセンが3度も攻撃(1740~64年)



結果:全シュレージエン譲渡

→プロイセンシュレージエンの誕生

エ)ゲルマン化の徹底

i) オーバーシュレージエンの住民の大半は
はっきりした民族感情無

→ゲルマン化は容易

ii) WW I 後→ヴェルサイユ条約でポーランド
復活

問題点:南シレジアの国境線

→結果：カトヴィッツ周辺以外ドイツ領

c)断崖のような経済格差

ア)ドイツ人の有利さ

1989年、ポーランド内のドイツ人増加

理由：ドイツ人→経済的に有利

イ)経済援助への期待と不安

ポーランド予定への投資→低調

d)1991年の善隣友好条約が積み残した難問

ア)あまりにも非対等な関係

- i) ドイツに経済委託→ドイツ資本に席卷
- ii) 独仏関係を理想→現実：国力などに差

イ) 棚上げのままの問題

- i) 1991年、独・波間善隣友好条約締結

内容：旧ドイツ領に在留の少数ドイツ人に
ドイツ語文化の維持を承認

→条約には不記載

- ii) 被追放ドイツ人たちの財産問題→未解決

2) 第2章 ロシア

a) なぜドイツへの回帰か

ア) ドイツ領への復帰

i) ソ連解体後、一部の都市でドイツ風の名に復帰

イ) カリーニングラード：ドイツ人建設の町

i) 1255年からWWⅡ終結まで、本来のドイツ人の町

ii) 1990年にロシアはここを経済特区に指定

b) ドイツ騎士とハンザ都市の歴史

ア) 布教と毛皮のため進出

- i) 11世紀頃、帝国東南のボヘミア、東部
オーダー川を越境、東方植民に加入
→北では、バルト地方に進出



主に、毛皮商人、司祭、軍事植民目的の騎士団

ii) バルト南岸東部

- 例外的に異教の地として放置



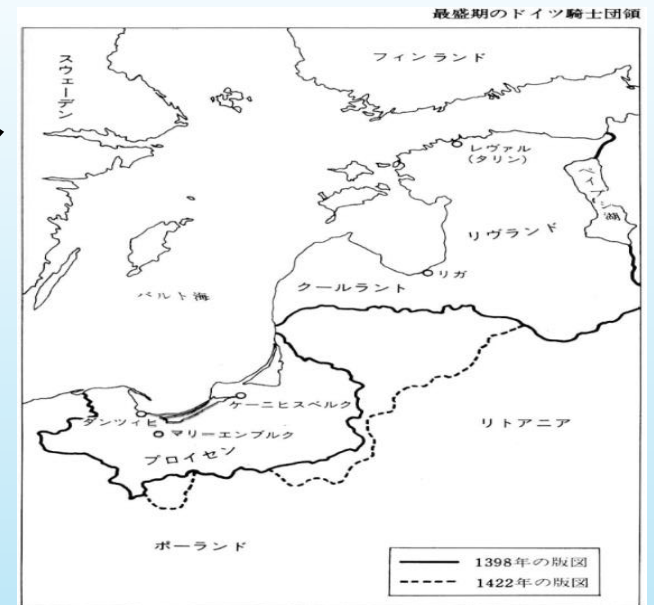
このため、周辺列強が介入
→この裏に経済的関心
イ)バルト・ドイツ人の誕生

i)ドイツ騎士団

→神聖ローマ帝国からプロイセンを
自分の領土として承認



キリスト教の考え方：異教徒在所の土地は、主
のいない土地



→ケーニヒスベルク、ダンツィヒ含有の
広大な一帯がドイツ騎士団領編入の発端

ウ)企業体としてのドイツ

i)バルト海南岸西側



→1159年に誕生のリューベックを拠
点にドイツがハンザ都市を構築

エ)バルト・ドイツ人の運命

i)バルト地方では、リガ、タリンも13世紀
後半に加入→後に騎士団に合流

→しかし、プロイセンとは別の道を選択

ii) リガ、タリンは1923年にロシア領に

→しかし、ドイツの上層階級は健在、
経済、文化も残留

c) 西ヨーロッパの窓、サンクトペテルブルク

ア) 新首都は近代の象徴

i) ドイツ語風の名でも造ったのはロシアの

ピョートル大帝→オランダを歴訪

→海面より低い土地のアムステルダム
に強印象



ネヴァ河口の沼地に再現の際、オランダ語風から今のドイツ語風に変更

ii) ロシア近代化のためドイツなどから様々な分野の専門家を招待

→ 軍の再編もドイツ人が圧倒的に多い



ロシアのドイツ時代の幕開け

i) ロシア人の不幸

i) ドイツ人の成功は、彼らの規律、勤勉とともに特権の差も原因で、ロシア人と対立

ii)ロシア人の反感は、ゲルマン化憂慮の19世紀後半のスラブ主義が台頭

→しかし、担い手はドイツ人

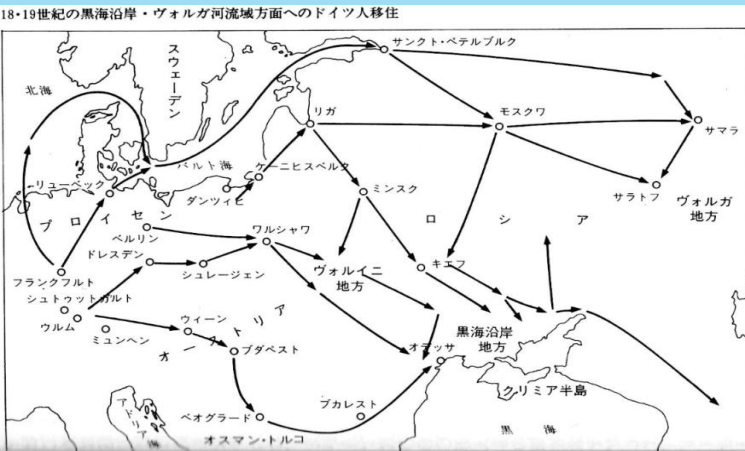
d)ヴォルガ・ドイツ人をめぐって

ア)ヴォルガ流域、黒海沿岸への入植

i)旧ソ連には200万近いドイツ人が居住

→ドイツ人の子孫の大部分はヴォルガ河沿岸、黒海沿岸に入植

→ヴォルガ地域のドイツ人ヴォルガ・ドイツ人と呼称



ii) ロシア残留のドイツ系住民のうち60万人
がドイツへ移住希望

→しかし、旧ソ連は頭脳・労働力の損失
、ドイツは移住に伴う住宅不足に懸念

イ) 開墾のためにドイツ人招待

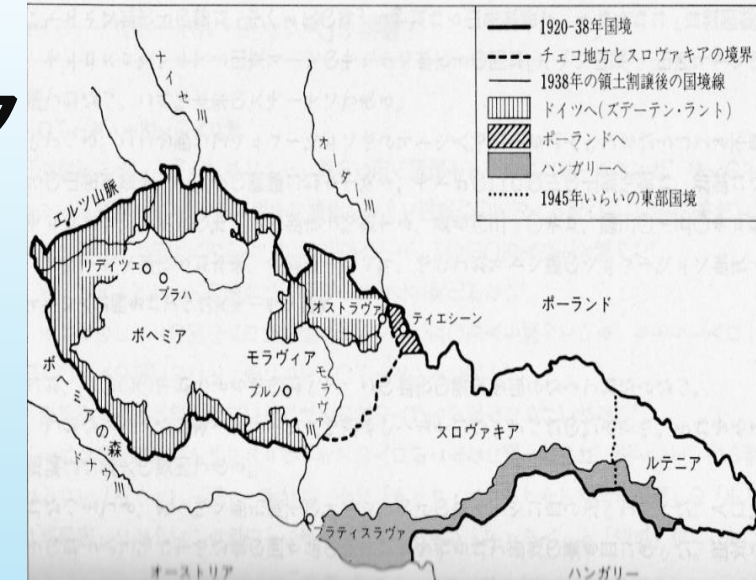
i) 18世紀後半以来、これらの地域に定住

→女帝エカテリーナ二世が招待令発布、
ドイツ人を誘致

ii) しかし、不満続出

理由：劣悪な気候、周辺民族との争い

3)第3章チェコスロバキア



a)ズデーテン・ドイツ人の悲劇

ア)20%近くの人口減少

i)チェコスロバキアは国境の変化は皆無、
しかし、戦前よりも250万人減少

理由：以前、チェコ共和国居住のズデー
テン・ドイツ人追放のため

イ)戦後ドイツ人を追放

i)1945年、チェコスロバキアの再生

→チェコ、スロバキアの民族優先の条約

→ドイツ人を追放、両者だけの国に

ウ)支配への反動としての追放

i)十九世紀からチェコスロバキアの民族意識が発生

→ナチスがこれを妨害、残虐な支配開始

→その反動で追放

ii)ドイツ人追放の問題は両国で議論

b)追放補償、そして経済的保護

ア)複雑な歴史の影濃い条約

i) ドイツとの善隣友好条約は困難で、1991
年に仮調印、4ヶ月後に本調印

→両国の政治的、歴史的背景で根強い反対
イ) 経済発展か、悪夢の再現か

i) チェコスロバキアの復旧には外資が必要
→しかし、ドイツ資本は敬遠

c) 幾度もの、中世以来の民族対立

ア) ボヘミア王国の隆盛

i) 13世紀頃ボヘミア王国はヨーロッパ有数の
の大国

→ドイツ騎士団と協力、プロイセンに進出

ii)ドイツ人誘致政策は11世紀から開始

イ)反ゲルマン感情の発生

i)14世紀ボヘミア王が帝国皇帝に選考後、
国内のドイツ勢力が脅迫、大きな痛手に

ii)13世紀まではドイツによる屈服に無頓着

→14世紀にゲルマン化の概念が顕現

→ドイツ人に対しての反感が生起

d)民族共存の失敗の歴史

ア)戦後初のドイツ系市長

i)タホフ：ドイツ国境に近い町

→ここでもドイツ人を追放、そこにチェコ、スロバキアなどから人が移住

ii)市長はこの町で唯一のドイツ系

→しかし、父親がユダヤ系のため残留可

イ)国境横断の地域経済協力

i)1990年12月にドイツ・チェコスロバキアが会合

チェコ：ボヘミアからの追放、財産没収などの被害の補償

ドイツ：居住権保障、仕事場の確保

→互いに協力

4)結論

ドイツの経済支援に期待の一方、ドイツの進出に警戒

理由：ドイツによる経済的侵略の懸念

引用：国境を超えるドイツ その過去・現在・未来